

私と音楽との出会い

1972 化学修士卒 指原建司

東工大は不思議な懐の深い学校で、今でも日本の陶芸等の工芸において先進的な団体である国画会において、東工大で釉薬の研究から陶芸に新しい道を拓いた浜田庄司さんの作品の伝統が生きています。

又、戦後の論壇に新しい観点から切り込み、40 年以上も前の大学闘争で学生に影響を与えた吉本隆明氏も、東工大の化学科で研究をされておりました。たまたま卒業時の指導教官でいらした、小林宏先生から当時の研究室の寄せ書きをいただき、氏の名前が書いてあり驚いた思い出があります。

今でも、その伝統からか混声合唱団（コールクライネス）が他の総合大学の合唱団を抑え、日本一の大学合唱団になっております。

私と音楽との出会いを振り返ると、子供の頃に聴いた母が歌うラジオ歌謡や軍歌であり、高校では音楽を選択したものの、「教則本（コーリューブングン）」の難しいリズムと音の変化についていけず沈没したことであり、1965 年に東工大に入学し、友人からの誘いで男声合唱団（シュワルベンコール）に入ったことが思い出されます。

特に、シュワルベンでは毎日昼休みの発声練習と 2 回／週に放課後練習があり、音感が悪いが、声だけが大きかったようで、「ほら貝のような声で下級生を困らせる」と言われておりました。

当時の学生指揮者の方が細かく御指導をして下さったお蔭で、それなりに音程が取れるようになり、ハーモニーの素晴らしさが分かるようになった頃、キリスト教の信仰を持ち、教会の聖歌隊でも讃美歌を歌うようになりました。

しかし、私の中での音楽はあくまで気分転換が目的であり、自分から何かを求めて歌っていたのではなく、就職して仕事が忙しくなると音楽は疎遠になってしまいました。

夢中になって仕事をしていた製造現場から、工場スタッフへの異動で、意気消沈した日々を送っていた頃、上司の勧めで地域の音楽好きを集めた混声合唱団（西湘音楽フェスティバル）に参加しました。

音楽で落ち込んだ気分を転換しようとの軽い気持ちで参加したのですが、黒岩英臣先生の指揮で、ブラームスの「ドイツレクイエム」の練習を始めた時、今まで体験したことがなかった音楽が持つ濃密な時間があることに気付きました。黒岩先生の指揮棒から出るエネルギーに吹き飛ばされ、下手ながらも彼の音楽に引きこまれてしまいました。生まれて 40 年の中で初めて体験した充実した時でした。

大学時代アウグスティヌスの時間論を学んでいた時、アリストテレスの時間を物体の運動に即して、一様な時間に分割する考え（時計のイメージ）に対し、アウグスティヌスは意識の事実を内面化した（過去は過ぎ去ったもの、未来はまだ来ないもの、現在の一瞬だけが存在する）との

説明を受けましたが どうしても分かりませんでした。しかし、それが 20 年経って、合唱の練習の中で、時間には濃い、薄い差があることに気付いた時、初めてアウグスティヌスの内面化した心象時間とアリストテレスの機械的時間との差を納得できました。

しかし、演奏会が終わり、新たな指揮者での合唱練習が始めると、又薄い、のっぺりした時間に戻ってしまい、団員は変わらないのに黒岩先生の指揮で体験した充実した練習の時間はなくなりました。

後から考えると、濃密な時間を体験する 3 要素があり {①作品の質：楽譜には作曲家の数年の苦闘の時間が込められている、②指揮者の質：指揮者は作品を理解し、それを自分の音楽として表現するために何年もの研鑽を続けている、③歌手の質：合唱団の団員も私のように大学時代の合唱経験等で、指揮者の意図を理解する土台があり、更に指揮者の指示を受入れようとする気持ちがある。}、どれ一つが欠けても成り立ちません。そんな風に考えていくと、練習の中で、作曲家、指揮者がかけた時間が引き出されると仮定し、それを 2 年強として 20 000 時間が含まれることとなりますから、2 時間の練習とすると、その間は通常の 10 000 倍に濃縮された時を楽しむことが出来るという訳です。

その後、黒岩先生の質を継承する指揮者である松村努先生が指導しておられ、宗教曲に取り組んでいる湘南フィルハーモニー合唱団に 1994 年に入団しました。第 5 回の定期演奏会からの参加で、来年 (2015 年) の 4 月 11 日の第 24 回定期演奏会では思いで深い、ブラームスの「ドイツレクイエム」を「すみだトリフォニーホール」で演奏します。聴衆の方と濃厚な時間を共有出来れば幸せです。

20 年も合唱団で練習しておりますが、歌手である自分の質をあげる必要に迫られ、もう一度基礎に戻って個人レッスンを受けることにしたことから、更に音楽との関わりは広がりました。

指導者は一流でなければダメだとの信念で、娘に頼みこみ、彼女がドイツの音大と一緒に勉強した友人で現役のオペラ歌手である大槻孝志先生に個人指導をお願いしました。発声法を深め、課題曲を練習していくと、今度は聴いてもらいたくなり、たまたま高校時代の友人からピアノの発表会での出演依頼もあり、初めて小ホールでのピアノ伴奏で日本歌曲の独唱をしました。

仙川アヴェニュー・ホールでの発表会では、近くに住む元の会社の同僚をお呼びしたところ、彼が長年楽しんでいるバロック音楽のアンサンブルに誘われ、伴奏付きでバッハの口短調ミサのバスアリアを歌うことが出来ました。バッハの曲はまさしく発声練習のような音の動きがあり、独唱をして、発声練習の大切さを再認識し、合唱と相乗効果があることに気付きました。今後も様々な出会いがあれば、前向きに取組み、全身を使う歌を続けることで痴呆への道は少し先延ばししてもらいたいと願っています。

筆者いわく：学部学生向けに、「大学での出来事が人生の土台になり、その時は各人によって違うが人生の気づきの時は確実に来る。そして、そこから、いろいろな人との新たな結びつきが生まれ深められる」ということを書きたかった。